

万人の農民の生活収入源となり、産業全体として300万人を超える人々が直接関わっている⁶⁾。インドでは300万人がコーヒー産業に従事している⁷⁾。

コーヒー産地の惨状

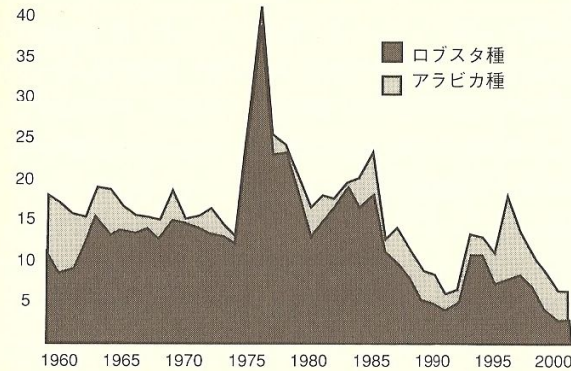
ロブスタ種、アラビカ種を問わず、農家に支払われる価格は恐ろしいほどに低下した。1997年に急勾配の下落傾向を見せ始めたコーヒー豆の価格は、2001年末には30年来の安値となり、02年7月までほぼその水準で低迷している。この間のインフレーションを考慮すると、コーヒー豆の「実質」価格は劇的に低下し、1960年のわずか25%の水準にある。つまり、同じ額の収入でも、40年前に買ったものの4分の1しか買えなくなっているということである(図3)。これは、おそらくこの100年間に農民に支払われた最低の実質価格である。

ランデル・ミルズ・コンサルタント社は、2001年末時点でのコーヒー価格は、ロブスタ、アラビカともに、生産に要するコスト全体を賄い得るものではないと測定している。ロブスタの場合、変動費(肥料・農薬など直接材料費)にも対応できなくなっている。世界でも最低コストの生産地であるベトナムのダクラク省でオックスファムが行った調査によると、02年始めに生産者が受け取った価格は生産コストの60%ほどでしかなかった⁸⁾。

コーヒー価格の下落によって基本的な生活費さえも賄えない農家にとっては絶望的な状況である。ほとんどの農家にとってはコーヒー豆からの現金が決定的であって、普通は苦しいときをしのぐ貯蓄はない。土地を手放さざるを得なくなったり、出稼ぎのために家族がばらばらになったりすることで、地域社会全体に致命的な打撃を与えている。

「大勢がメキシコに出稼ぎに行っている。3~4ヶ月前、ある村に8台のトラックがやってきて、メキシコの大農場で働けそうな人たちをみんな連れて行ってしまった。そうやって4~6ヶ月働くのだ。これは、深刻な家族の崩壊を招いている。」とグアテマラの協同組合「マノス・カンペシーノス」のメンバーであるジェロニモ・ボレンが語っている⁹⁾。

図3 コーヒー豆の実質価格の暴落
(1ポンド当たり米セント)



資料：世界銀行

注：1999年価格を基準にした実質価格
2002年に関しては1~5月の価格

どうしようもなくなったメキシコやホンジュラスの農民たちは、アメリカ合衆国に逃れることを夢見る。2001年には、メキシコ東部の州ヴェラクルスから運を試そうとやってきたコーヒー農民たち6人が、アリゾナ州の砂漠で遺体となって発見されている¹⁰⁾。

熱帯雨林の保護活動を展開するNGOである「レインフォレスト」(熱帯雨林)のセザール・ピラスエヴァによれば、「コーヒー豆の価格暴落は女性に直接打撃を与えている。家族の中心(男性)の多くが1年のうちの相当期間出稼ぎに行き、あとの農業労働には女性と子どもたちだけが残される。結果として、数多くの子どもたちが学校に通えなくなっている。」コーヒーの収穫の際に日雇い労働者を雇う家族では、女性たちの労働量が増大している。しかし、コーヒー豆の収益が減少した今となっては、労働者を雇うことも難しく、結果として、家族内の女性たちが多くの仕事をせざるを得なくなって